

附属坂出中学校 研究の現状（24年度の実践）

1 平成24年度教育研究発表会

研究テーマ	「学ぶこと」と「生きること」の統合 —かかわり合う中で、自己の学びをつむぐ—
-------	---

6月1日（金）、平成24年度教育研究発表会を開催した。

当日は、県内外の小・中・高・大学及び教育機関より約600名の参会者をお迎えし、本校の研究実践をご覧いただくとともに、全国にその意義と歩みを発信することができた。

研究の柱は、次の3点である。

- ① 自立した学習者を育成するカリキュラム整備
- ② 学習の意味や価値を実感できる学習場面の構築
- ③ 認知的個性（CI）を活かす学習支援の工夫

【研究発表会での公開内容】

共通学習Ⅰ（習得型）

共通学習Ⅱ 活用型

対話（交流の中で新しい意味や価値を創造する営み、事象を新たな角度からとらえ直す機会）と内省（自己内対話による振り返り）により、生徒が自己の学びをつむいでいく学びの授業づくりを、各教科の特性に応じて提案した。

総合学習シャトル学習

教科学習における活用と総合学習における探究とをつなぐため、探究に必要なスキルを学び、それらを活用して探究シミュレーションを体験する場としてのシャトル学習を実践提案した。講座に有効なMI（認知的個性の一つで、テストでは測ることのできない潜在能力や知能）を示すことで、生徒が自分の個性をより発揮できるような工夫も行った。

総合学習 CAN

異学年合同（1～3年）の小集団（クラスター）で、自らの興味・関心をもとに設定したテーマのもと、教科の枠を越えた研究活動を行う学習である。本年度は自分のMIを、テーマ設定や研究仲間の勧誘を行ったり、特設講座（探究スキル習得のための講座）を選択する際に参考にしたりしている。また、探究途中の問題を解決に導くためのAL会議を導入し、質問と振り返りにより気づきを生み出す「附中版AL会議」を実践提案した。

シンポジウム

松村 暢隆氏（関西大学文学部教授）石井英真氏（京都大学大学院教育学研究科准教授）山本茂喜氏（香川大学教育学部教授）伊藤裕康氏（香川大学教育学部教授・本校校長）の4名の先生方に「新しい時代の授業づくり」というテーマで、次代の学びを創造する授業についてご提案いただいた。

全体講演

角屋 重樹氏（国立教育政策研究所 教育課程研究センター 基礎研究部部長）に「真の学びの向上と問題解決過程」という演題でご講演をいただいた。

[成果と課題]

本校の提案するカリキュラム（共通学習—シャトル学習—CAN）の考え方、系統性、意義等について概ね賛同された。また、学びの意味や価値に気づかせるため、授業場面において、質問を中心

とした対話と自己理解するための内省を促すことの有効性についても、好意的な感想が多く寄せられた。

今後の研究の方向性としては、次の3点を考えている。

- ① 学んだことの自己理解を深め、学びの意味や価値に気づかせるためのかかわりの研究を深める。学びの意味や価値の実感が学習意欲と十分に結びつき、教師や仲間との適切なかかわりの中で実現できるよう、さらに研究を深める。
- ② シャトル学習とCANとの関連を深める。CANのテーマとの関連を考慮してコースを選択させたり、探究課題をより開かれたものにしたり等、改善していく。
- ③ 認知的個性(CI)の活動を充実させる。CANやシャトル学習だけでなく、共通学習にも取り入れ活用することで、より個が生きるカリキュラムを展開していく。

2 新研究の方向性について

本校が目指す教育活動の方向性は継続する。『学ぶこと』と『生きること』の統合のための「学びの意味や価値を実感する授業」をより一層重視するとともに、そのために欠かせない「協同的な学び」のあり方についてさらに追究していく。

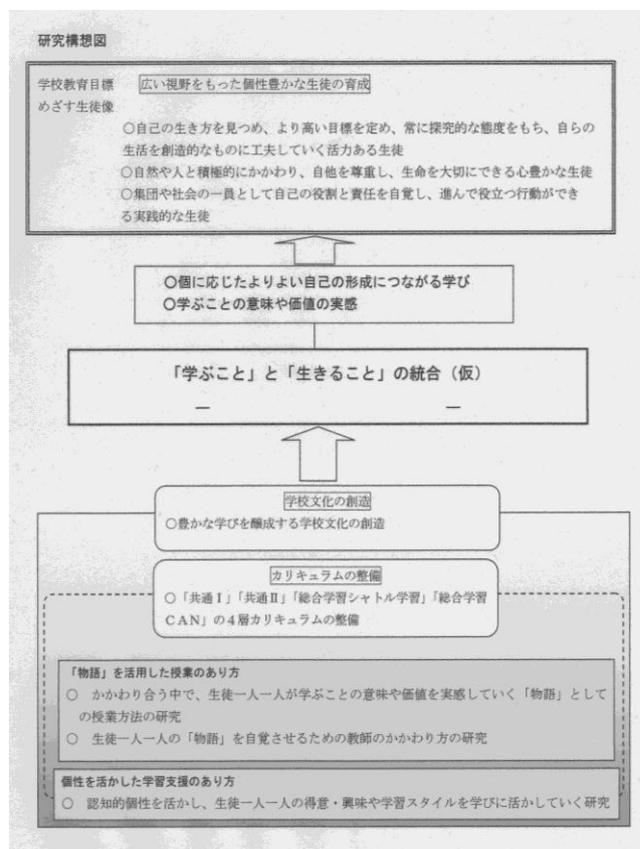
そもそも私たちが学ぶというのはどういうことなのか。文部省中央教育審議会(1996)「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」(第一次答申)には、「教育は、子供たちの「自分さがしの旅」を扶ける営みとも言える。(中略)知識もあれば感情もある。知性もあれば情操もある。認知もあれば情動もある。(中略)学習というのはそういう『この、わたし』がどうなるのかということ、あるいは『わたしが、このわたしをどうするのか』というように、主体的な自己が対象と関わっていく中で自己を明確化していくプロセスが学習である。」と示されている。言うなれば、知性と感性が統合され、自分の中に意味づけ、価値づける行為が学びである。そして本校が取り組んでいるカリキュラム研究の方向性でもある。

現在テーマについては実践を通じた研究の中で検討中であるが、これまでの方向性をふまえ、「物語」に着目した研究に取り組もうとしている。

私たちは一瞬ごとに変化する日々の行動を構成し、秩序づけ、「経験」として組織し、それを意味づけながら生きている。経験の組織化、そしてそれを意味付ける「意味の行為」が「物語」である。

また、個々の要素が同じでもそれをどのように関連づけ、組織立て、筋立てるかによって意味は大きく変化する。その意味づけに「語り」が果たす役割を本質的とみなす考え方が物語論の基礎にある。

語り手と聞き手の対話的關係の中で生成される物語は新しい意味や価値を生み出していく。論理



的知ではなく、感性的知にかかわる「物語」モードでの個の学び、そしてそうした集団へ教師がどうかかわっていくかについて、「認知的個性」を活かしていく基礎研究と結びつけながら研究を進めている段階である。

3 その他

4年目を迎えた総合学習 CAN では、年を追うごとに探究に熱中する生徒が増えてきている。本年度は、外部への取材、連携、発信が積極的に行われている。「名物かまど」とのタイアップにより、商品化までこぎつけた探究が行えたクラスターもあった。

今後も「生涯にわたって学び続けることができる自立した学び手の育成」にむけ、研究していきたいと考えている。

【CAN プレ発表会】

